

## 香りの思い出大賞

国語の時間に、村山先生が大きなポスターを貼り出した。「香りの思い出大賞 作文コンテスト大募集」と書いてある。有名なシャンプーを作っている会社が主催しているらしい。入選者一千人にシャンプー一年分と金一封を贈呈すると書いてある。

「今日はこの賞に応募する作文を書く。」  
先生がポスターをあごで示した。

「『香り』に関する思い出なら何でもいいから自由に書きなさい。去年は、となりの小学校で入選した者が二人いるそうだ。」

「先生、金一封っていったいくらなんですか？」  
タカシが甲高い声で聞いた。タカシはお金のことになると目の色が変わる。

「そりや分かんが、大きな会社がやることだ。まあ一万円はもらえるだろう。」

教室中がどよめいた。ケンタなんかはもう黄色い歯をむきだしにしてはしゃぎまわっている。

「うひひ、一万円だ、一万円。一万円ったら一万円。」  
確かに一万円は魅力だった。それに作文なら自信がある。タカシは腕まくりをして作文に取りかかった。

「香りの思い出

松浦西小学校6年3組

大野 孝志

先日、柔道の地区大会に行った時のことです。ぼくた

ちのチームは準決勝まで勝ち進みました。その準決勝の試合の相手は大瀬戸地区。大会で一、二を争う強豪です。しかも黒沼という大將は大外刈りが得意な本格派。それまでの試合も全部一本勝ちをしていました。

それに対してこちらの大將はノブオ。巨体だけが取りえのでぶで、ダイエツトのためだけに最近柔道を始めた男です。まだ技も何も知りませんがメンバーが他にいないのでしょうがありません。いつもの大將の野田君はその前日に「忍者ごっこ」をしていて骨折してしまっていました。

大瀬戸チームとの試合が始まりました。大將があてにできないぼくたちは何とか大將戦になる前に三勝あげようと頑張りましたが、残念ながら二人負けてしまいました。勝負は一勝二敗。試合は大將戦にもつれこみました。いよいよ巨漢ノブオと、本格派黒沼の対決です。ノブオが、ゆっくり立ちあがって構えました。本当は単にのろいだけなのですが、それだけ見るとまるで落ち着き払った柔道の達人のようです。

「ノブオ、がんばれ。」

「楽勝だぞう。」

ぼくたちは必死になって応援しました。なにしろこの試合に勝てば永井さんが牛丼を食べに連れていってくれることになっていたので。と、次の瞬間には黒沼が早くも足払いを仕かけました。ノブオはあっという間にバランスを崩し、黒沼を抱きかかえるようにして前のめりに倒れこみました。その時、黒沼の顔が引きつったようにしかめているのが見えました。それでぼくは思い出しま

した。ノブオは大の汗っかきで、またその匂いがすごいのです。しかもその日ノブオが着ているのは体育館のみっこから探し出してきたかびだらけの道着でした。その二つの混ざり合った匂いがどんなに強烈なものか、想像しただけでも気分が悪くなるぐらいです。

二人はどちらも倒れこんでいました。上になったノブオの腕が黒沼の帯の部分にかかっけていて偶然ながら四方固めのようにも見えました。そしてその直後に黒沼が顔を右に左にゆがめるようにして「参った」の合図をしました。恐らくそれ以上ノブオの悪臭をかがされるのが、耐えられなかったのでしょう。

「勝った、勝った。」

「やったあ、ノブオ！ 匂い攻めだ。牛丼だ！」

ぼくたちは大喜びで歓声をあげました。

これがぼくの香りの思い出です。」

タカシは自信満々で作文を提出した。一ヶ月後、香り大賞の入選者が発表された。シャンプーはいい香りというイメージを大事にする。当然ながらタカシの名前はどこにもなかった。

## 課題

みなさんも「香りの思い出」を題にして作文を書きなさい。

